ドキュメンタリー映画

さなぎ

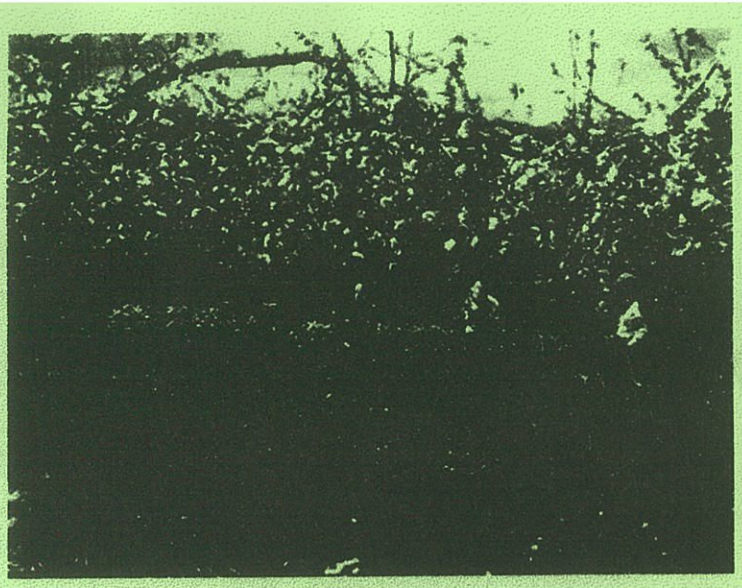
～学校に行きたくない～

三浦淳子監督作品

どうして、この子が不登校？
伊那谷の自然につつまれて
一生懸命に遊ぶ少女の輝きと
それを見守る母親の心の軌跡を
十四年にわたりみつめたドキュメンタリー
子どもの成長、いのちについて問いかける

子育て中の身としてこの作品に救われました。
いつから、子どもにとって、学校と勉強が
一番大切な事になってしまったのでしょう。（三十代母親）

www.tristellofilms.com/sanagi



これまで誰もみたことのない「いのち」のおののき

―――――――――――― 芹沢俊介（社会評論家）

一つのいのちを取りまく溢れるくらい豊饒な水と大地、光はどこまでも澄んだ大気をきらめかし、樹木が風を誘っている。幾筋もの道がこれら自然の中を縦横に走り、一緒に歩きまわる３人の友がいて、家があってそこにおろおろと見守る母がいる。こうした確かな手応えのある自然に対立するかのように学校がある。この対立のただ中に置かれた愛と名づけられた女の子が、不安にさいなまれつつも、内なる自らのいのちに促されるように、少女へと、女へと力強く美しく変貌してゆくのだ。三浦淳子監督は「空とコムローイ」（2008年）に続き、またしても、これまで誰もみたことのない「いのち」のおののきを、繊細かつ大胆な自然の物語へと織り上げたのである。

妖精たちは遊ぶのを楽しんでいた

―――――――――――― 鈴木志郎康（詩人・映像作家）

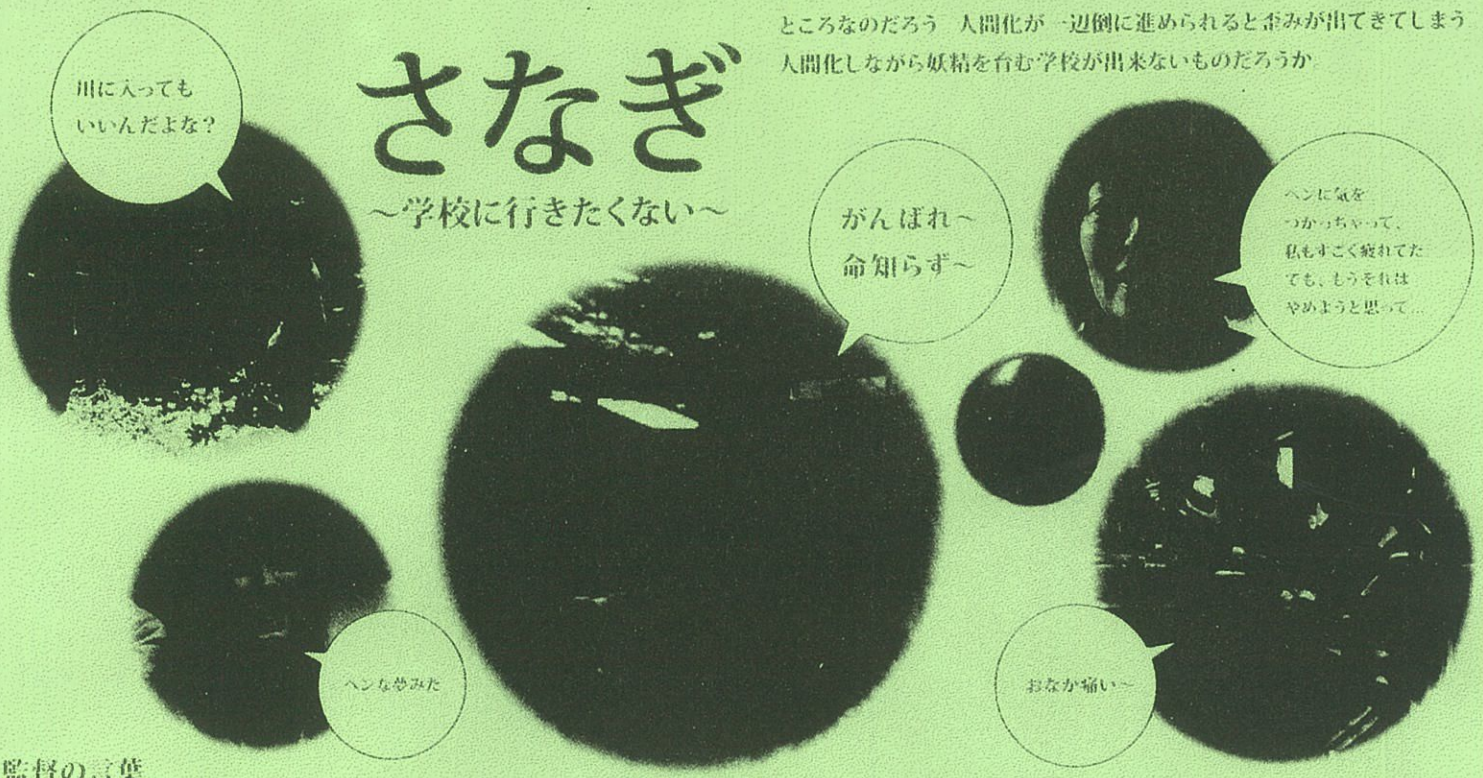
「さなぎ～学校に行きたくない～」は、少女という存在の日常の行いを通して人が心の奥に持っている遊ぶ心をくっきりと見せてくれた。遊ぶ心が大切なのだ。草が生えている坂の斜面に寝ころんで何度もごろごろ転がって喜んでいる。捨てられたマイクロバスの錆びた車体の上にのぼってこわごわとダンスする。そういう少女たちの姿を見ているうちに、この子たちは妖精だと思った。そして突然、妖精には学校は必要ないのだと考えた。少年も少女も本質的には妖精なのだ。しかし妖精のままでは人間の社会では生きられない。そこで妖精の人間化を計るシステムが学校というところなのだろう。人間化が一辺倒に進められると歪みが出てきてしまう。人間化しながら妖精を育む学校が出来ないものだろうか。

友達と野山を転げまわったり、花を摘んでおままごとをしたりするのが大好きな愛ちゃんが小学校に入学して間もなく、学校に行けなくなった。困惑しつつも、お母さんは、愛ちゃんの心に寄りそって、

一日を生きるようになる。
自分の人生を、自分なりの時間でみつけようとする、
小学３年生から大学生になるまでの愛ちゃんと
愛ちゃんをささえる家族を静かにみつめたドキュメンタリー。

さなぎ

～学校に行きたくない～



監督の言葉

私の友人の娘の愛ちゃんが、小学校に入学して間もなく、不登校になったという話を聞きました。実は、私も小学校に行くのがつらかった時期がありました。でも、学校に行かなかったら人生終わりだと思っていた。学校に行きたくないという心の声を聴いて、学校に行けなくなった愛ちゃんに、会いたいと思ったのです。幼虫から成虫に変化する「さなぎ」の間、内部では、幼虫時の器官がどろどろに溶けて、新しい器官が生まれるのだそうです。静かな外見からは想像しにくい、ダイナミックな変容が起きている。人間も「さなぎ」の時間を必要としているのかもしれません。　三浦淳子

監督・撮影・編集：三浦淳子／プロデューサー：岩永正敏
整音：鈴木昭彦、真弓信吾　編集助手：大川景子
カラコレ：斎藤直彦（ヨコシネD.I.A.）　宣伝美術：村越豊
宣伝コピー：シラスアキコ　宣伝協力：猿田ゆう
助成：文化芸術振興費補助金
製作・配給：クロスフィット、トリステロ・フィルムズ
厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財
2012年　日本映画　103分　カラー　ドキュメンタリー

自主上映募集中！ お問合せはトリステロ・フィルムズまで 090-6190-8588 e-mail:info@tristellofilms.com 〒222-0026 横浜市港北区篠原町1001

大倉山ドキュメンタリー映画祭 in 大倉山秋の芸術祭2018

☆日時　11月5日11:00～13:15　☆開場は上映の10分前 ☆上映後監督によるトークがあります。

☆会場 大倉山記念館 第10集会室　東急東横線・大倉山駅下車 徒歩8分 横浜市港北区大倉山2－10－1

☆入場料1000円（小学生以下無料）　☆問合せ 090-6190-8588(三浦)